

会のように、および EARTH という主に国外で活動する NPO 団体のメンバーであった。つまり、導き系統制を超えた経路から多数の支援者が参集し、教会のルーティンを超える活動に取り組んだのであった。

いわき市における創価学会の拠点は、いわき文化会館である。当地では、一九五四年頃から教勢が拡大し、現会館が鉄筋化されたのは一九七七年のことである。常磐総県(いわき市と相双地区)で約一万世帯の教勢を誇る。震災では、人的・建物被害はなかったが、当日、約百人が会館に避難した。翌日、原発事故報道を受け、五十キロメートル圏外のいわき平和会館に移動したが、避難者は一五〇人に増えていた。約十日間、平和会館は(行政指定ではない)避難所として機能する。新潟からのおにぎり六千個の差入れを皮切りに全国から支援物資が送られ、断水かつ行政支援がない状況下、非会員十数名を含めた人々を保護した。その後も、本部から応援職員が派遣され、安否確認・会員掌握が進められるとともに、各地から送られる支援物資を会員を通じて配布して回った。

両教団の活動には、(約一月後以降は)自発的・分散的な支援活動を展開した天理教と、一貫して集権的・計画的な支援活動を展開した創価学会という対照があるが、積極的かつ継続的に震災対応・地域復興に取り組んだ点は共通している。また、自治体に多額の義捐金を拠出した点、教団リーダーのメッセージや慰問が信徒を大きく活気づけた点も共通している。これは、伝統宗教と対照をなす側面であろう。

他方、阪神大震災に関する研究では、「社会の危機」に際し

て「教団はさほど活躍しなかった」「新しい動きを見せることはなかった」と評価されたことがあったが、今回の大震災では、上記二教団は、非常時下、実質的に行政機能を代行し、地域コミュニティに対して大いに公益性を発揮した、と評価してよいだろう。

今後も、いわきという三重苦(地震・津波・原発)に苦しみ、多大な避難者を出すと同時に大量の避難者を受け入れている特殊な地域において、新宗教教団がどのような活動を行っていくか、注意深く観察を進めていきたい。喫緊の課題は、避難地域から移住した信徒(定住志向は未確定)の現地適応をめぐる問題への注視であろう。

パネルの主旨とまとめ

寺田 喜朗

震災発生以降、大正大学宗教学研究室は、学外研究者との連携・協働を図りながら「いわき市」とその周辺をフィールドにした調査研究に着手している。震災被害(原発問題を含む)の実態、および被災地の復旧・復興、住民の移動とコミュニティの再編をトレースしながら、いわき市周辺において①仏教・神道・キリスト教・新宗教(諸宗派・諸教会・諸教団)の宗教者・宗教団体はどのような支援活動を行い、②地域コミュニティの中で、いかなる役割を担っているか(いないか)、また、どのような期待を受けているか(いないか)、③東日本大震災は被災地の宗教伝統にどのような影響を与えているか(葬送・祭礼・芸能等といった伝統的な宗教文化の頓挫・消滅・再興・

再編)、これらの問題群に対し、中長期的な研究計画を立て、断続的に実地調査に取り組んでいる。

今回のパネルは、①(および②)の領域に特化した(相対的に短期日の動き)諸データと分析結果を提示するものである。震災発生から約一年半、宗教者・宗教団体は、どのような支援・対応を行ってきたか、それは地域コミュニティにいかなる影響・作用を与えるものであったか、この情報・知見を共有することによって、宗教者・宗教団体の地域支援のあり方、ひいては社会貢献活動のあり方について検討を加えることを企図した。

冒頭の星野発表は、いわき市の地域特性と新旧宗教の概況を報告した。人口動態・産業構造を概観するとともに被災の影響(温度差)を明らかにし、原発避難者の二層性を解説した。また、様々な宗教の立地・分布を報告し、空間軸と時間軸を適切に押さえた研究の必要性を論じた。齋藤発表は、断続的に復興支援活動に取り組んできた高野山真言宗冷泉寺(およびグローバルミッションチャペル)の事例から、宗教者が地域コミュニティに果たした役割、有意な支援活動が可能となった条件を論じた。小川発表は、浄土宗の若手僧侶が中心となって結成された支援グループ(浜浄青)のネットワーク化のプロセスとその活動を報告した。さらに、彼らの活動をバックアップすることになった宗門組織の機構についても論及を加えた。寺田発表は、いえ・おやこ組織類型の新宗教教団として天理教(と真如苑)、なかま・官僚制連結組織類型の新宗教教団として創価学会(と立正佼成会)を取り上げ、それぞれの支援活動を紹介

し、その特徴を論じた。

四発表の後、コメンテータの對馬路人氏から、①(新宗教に限らず)現地の宗教を典型的に捉え、支援活動を分類して把握すること、②(今回は支援に成功した事例が取り上げられていたが)支援できなかった宗教者・宗教団体が直面した阻害要因の分析、③支援する側に止まらず、支援される側の反応・評価の分析、④宗教団体のメンバー(檀家・氏子・会員)と一般住民への支援の区分、といった今後の調査研究の課題や、⑤被災の影響を、衣食住にかかわる身体的なレベル、親しい人を失う社会関係のレベル、前途の希望を失う等の「心の傷」のレベルに大別した時、今後は心のレベル(宗教の真価が問われるレベル)が大きな課題となってくるのではないか、というコメントが出された。

また、フロアから「支援者が疲弊しないような取り組みはあったのか」「宗教者じゃなくともできた支援のように聞こえるが、宗教者ならではの支援とはなんだったのか」「都市全体を見れば、宗教者の支援など微々たるもので、有効とは見なされなかったのではないか」等と言った質問・意見や「宗教者による被災者収容のことをもっと説明して欲しかった」等のコメントが寄せられた。会場には三〇人を超える聴衆が詰めかけ、活発な討議・情報交換がなされたが、実に様々な角度・立場から、今後の調査研究の課題・留意点を指摘・提言して頂けたことは、誠にありがたかった。関係者各位に感謝するものである。